茨城大学ダイバーシティ推進室
NEWSLETTER
2023/03 vol.21

ダイバーシティ担当 菊池理事が行く！
ー 附属学校園　編 ー

茨城大学にある“ダイバーシティ”をご紹介します。
今回は、Ｒ５年３月にダイバーシティ担当菊池理事と木村ダイバーシティ推進室長、ダイバーシティ推進室室員とで訪問した 教育学部附属学校園 です。

附属学校園に入園・入学した多くの園児・児童生徒は、附属小学校、附属中学校と進学していきます。幼稚園から中学校まで在籍すると、12年の期間を茨城大学の附属学校園で生活することになります。この12年間のそれぞれの時期を、附属学校園の先生は、生徒たちが将来、社会に出ることを見据えて関わり、教育や指導をしていました。その一方で、教育学部とも連携し、教育に関する研究を行っています。各学校園からは、モデル校として、研究を地域の教育に還元するという使命感も感じられました。

茨城大学の大切な組織の１つである附属学校園をご紹介します。

附属幼稚園

入り口にピーターパンシリーズの銅像が並び、木造りの教室からそのまま外のグリーンの庭へと続く開放的な幼稚園では、この時は、80人ほどの元気な園児たちが、思い思いの場所で遊びに集中している姿が印象的でした。

附属幼稚園では、神永園長にお話を伺いました。

● 幼稚園での教育方法は？

子どもの興味・関心を高めるように働きかけをしています。**遊びの質を高める**ことをポイントに、**自分で考えることを意識**させ、**考え続けることを大事**にしています。

〈一例〉
・園児が恐竜に興味を持ったことから、どこで恐竜が見られるか、そこまでどうやって行こうかを園児と一緒に考え、ミュージアムパーク茨城県自然博物館に行った。
・園児が絵本の「100かいだてのいえ」を好きになり、美術館で展覧会を鑑賞し、実際に親子で思い思いに段ボールを使って理想の家を作成した。

● 地域の先生に向けた取り組みとは？

「リカレント研修」や「公開授業研究会」を実施しています。

・リカレント研修　：　「幼児教育」が未経験の先生向けに“遊び”をテーマに実務も行う研修です。茨城県から指導主事の先生向けにも実施してほしいとの要望も出ているそうです。
・公開授業研究会　：　教育学部と連携して研究を進めており、また、研究を公開して、地域の教育水準の向上にもつなげています。

左から、
菊池理事、神永園長、木村室長

幼稚園のシンボルキャラクターのムウくん。

子どもたちが中に入って動かすことができる大きな恐竜。園内には想像力溢れるアートがいっぱいです。

家を作ったときの様子。作った後にはそれぞれの力作、個性あふれる家々を訪問しあったそうです。

園庭は人工芝で園児ものびのびと遊んでいました。

附属小学校

左から、
木村室長、菊池理事、木野内副校長

生徒が興味を持つことで、大学や研究施設に行って直接お話を聞くこともあるそうです。

高学年生が使っていた見通しの良い教室。低学年生は仕切りで分けた大きな教室で授業を行っていました。

附属小学校では、木野内副校長にお話を伺いました。校長室隣からは、ピアノ伴奏と児童の合唱が明るく響いていました。また、当日は授業参観もあり、賑やかな場面もありました。

● 小学校の教育理念とは？

「個の確立」と「はらから」の精神を育むことを理念としています。
＊はらから … 同胞の意味。

● 小学校の特徴「はらから」活動とは？

人とつながる、人を貴ぶ精神を育てることを目的とした、他学年の子どもたちが一緒に活動することです。生徒は皆、「同学年のクラス」と、1年生から6年生まで混ざった「はらから学級」の2つに所属しています。同学年の横のつながりだけでなく、他学年との縦のつながりで活動することで**自分の考え方や伝え方、どうすればうまく活動が進むかを考えるきっかけ**になっています。現実社会に出た後、様々な年齢層の人と豊かに生いきていくノウハウを、日ごろから培っています。

● 地域の先生に向けた取り組みとは？

市内だけでなく、近隣の市町村の学校からも要望に応じて活動をしています。

- 出前授業 ： 実際に他の公立学校へ行ってその学校の生徒に授業を行い、その学校の先生と授業について話し合います。
- 新任研修 ： 水戸市内の新任の先生に附属小学校での授業を見てもらい、授業への理解を深め、質問に答えます。
- 教育研究発表会 ： 公開授業を行い、参加された全国の先生と教育方法について議論をしています。

附属中学校

春の息吹を待ち望む巨木が枝を大きく空に向けて広げる敷地内、生徒のお気に入りで休憩時間は集いの場になるという中庭には、木造りの椅子がいくつも並んでいました。歴史の厚みが心地よく伝わる学内を案内していただきました。

附属中学校では、岡田副校長、安主幹教諭、近藤研究主任にお話を伺いました。

左から、近藤研究主任、木村室長、岡田副校長、菊池理事、安主幹教諭

附属中のシンボルとなっている知恵の目。周りには青雲の志応援団が製作したベンチがあり、生徒たちの休憩スペースになっています。

● 中学校の授業の特徴とは？

「学びの価値を実感する生徒」になるべく、実際に体験し生徒同士で話し合うことで、**ものごとを理解するだけでなく、表現する力も育てています**。また、そのために先生は、積極的に全国の学校で行われる研修会などに参加し、その内容を中学校での教育に活用できるよう研究をしています。

〈一例〉・スーパーに売っている鶏の心臓から心臓の構造を観察する。
・宿泊共同学習や英語宿泊学習などの実施。

● 大学・地域とのつながりについて

茨城大学の教員だけでなく、**学生や中学校の保護者・卒業生とも連携して学校生活のサポート**をしてもらっています。

【茨城大学】大学生・大学院生は、部活動看護やこころのサポートセンターの担当者として活動しています。
【保護者、卒業生】スクールボランティアコーディネーターを中心に有志による活動が日ごろから活発に行われ、学生たちの豊かな学びの場を学校側と共創しています。

＊部活動看護
… 大学生が部活動をフォローする

＊こころのサポートセンター
… 人文社会科学研究科の学生が生徒の相談にのり、不登校になる前に学校にいやすい居場所となる場所。

＊スクールボランティア
… 学習支援を目的としたボランティア。保護者や卒業生など200名ほどの登録があり、5名のコーディネーターが連絡、調整を行っている。

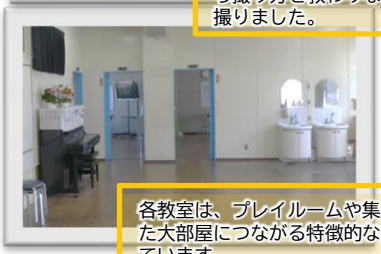
この他、県や市町村の教育委員会に授業研究会や新規教員向け研修などを実施していました。

附属特別支援学校

左から、
木村室長、中島副校長、島校長、菊池理事

作成した焼き物は、イベントで気に入ってくださった方へ渡り、作品が心を繋いでいきます。

地域交流でプロのカメラマンから撮り方を教わりながら写真を撮りました。



各教室は、プレイルームや集会室といった大部屋につながる特徴的な造りとなっています。

小高い丘を模した遊具が入り口にあり、校庭には伸び伸びとグランドを走る生徒の姿、廊下では訪問者を温かく教室に迎え入れてくれる生徒の姿が印象的でした。お伺いした当日は、附属特別支援学校への入学を考えている方の体験授業が行われていました。

附属特別支援学校では、島校長と中島副校長からお話を伺いました。

＊ 特別支援学校は、小学部、中学部、高等部と分かれており、幅広い年齢の生徒が学んでいます。

小学部

● 特別支援学校の強みとは？

他の特別支援学校より児童・生徒の人数を少なく設定しているため、**個別の対応が可能**となっています。また、**何か心配事などがあったときに大学の専門の先生に相談して対応することもできます。**

中学部

● 一人一人の特性と能力に応じた教育

勉強だけでなく、10分間走による日常的な運動や園芸、焼き物、写真など**卒業まで一人一人と向き合った教育**をしています。フライングディスクのクラブでは、みんなで集まって練習をし、国体等の大会出場を目指していました。また校内には、心身の緊張をほぐすために、個別に利用できるスペースも設置され、児童・生徒も親御さんも安心して過ごせるようにしています。

高等部

● 卒業後の関係

卒業後も、今までの卒業生へ案内を出し、“大同窓会”として特別支援学校に集まるイベントを行ってきました。コロナ禍で3年間、本校での開催はできていませんでしたが、また行えるよう準備を進めています。また毎年1月には、親の会主催の「成人を祝う会」を実施しております。

● 地域への取り組みとは？

特別支援学校での教育に関する研究成果を発信し、地域の教育の底上げを目指すとともに、市の教育委員会からの調査委員の委嘱を受け、就学相談会や様々な調査等を行っています。

● 茨城大学へも繋げていきたい

特別支援学校での教育に関する成果や、例えば、児童・生徒の作品などの展示を通じて、**ここでの豊かな経験や取り組みを、大学へ知ってもらう**機会を作っていきたい、とも考えています。

附属学校訪問の記

ダイバーシティ推進室長
木村 美智子　先生

今回は、菊池理事を教育学部附属学校園にご案内しました。私はダイバーシティ推進室長のほかに附属学校園担当として、＜附属学校園―教育学部―大学＞の連携促進に関わってきました。附属学校園では、児童生徒の学習環境を整備していく上で保護者や地域の方々と協力するなど多様な業務が求められており、長時間勤務が常態化していました。こうした状況を改善するため、「働き方改革」がいち早く導入された結果、今では公立学校の働き方改革を進める上でモデル校となっています。人を育てるには多くの時間が必要ですが、教員の心身の状態が健康に保たれることも大切です。

ワーク・ライフ・バランスを実現するには意識改革が不可欠ですが、様々な制度を活用することも大切です。ダイバーシティ推進室では、必要な時に必要な支援が受けられるよう、これからもニューズレターを通して情報を提供して参ります。

今後は実際に附属学校で活動を行う茨城大学の学生、附属学校園の求めに応じ様々な活動を行っている教員、若手教員や女性教員の生の声を取り上げながら、引き続きダイバーシティやワークライフバランスについて発信をしていきたいと思います。